



ウィリアム・ジェームズ著 『情動とは何か?』

宇津木, 成介 [訳]

(Citation)

近代, 98:35*-68*

(Issue Date)

2007-04

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001554>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001554>



(翻訳)

ウィリアム・ジェームズ著『情動とは何か？』

宇津木 成介 (訳)

はじめに

以下は、ウィリアム・ジェームズ (William James, 1842-1910) の "What is an emotion?" (1884年 Mind誌 9巻, pp. 188-205) の全訳である。ジェームズの「悲しいから泣くのではない、泣くから悲しいのだ」という言葉は、多数の心理学の初等教科書に引用されており、心理学の世界では多くの人々に知られている。この言葉の出典として、"Psychology, the briefer course (1892)" (邦訳「心理学」今田恵 (訳) 岩波文庫) が挙げられるが、その感情 (情動) に関する章は本論文を下敷きにして書かれている。だからジェームズの考え方の源をたどろうとすれば、この1884年の論文に目を通す必要があるだろう。

訳者は、ジェームズの「泣くから悲しいのだ」という主張の根拠が心理学の初等教科書でどのように取り扱われているかに興味を持ち、その探索の糸口を見つけようとして「ジェームズの感情理論：教科書にあらわれるその根拠と論理 (2007)」を書いたが、その過程で、結局この1884年の論文を読むことになった。じっくりこの論文を読んでみると、ジェームズの精緻な観察眼に感嘆する一方、かならずしも厳密とは言えない論理に興味を惹かれた。また現時点での感情心理学の動向に関する示唆もあるように思われたので、この1884年の論文は、日本の心理学教育における基礎的な資料の一つとして、日本語に翻訳する

価値がありそうに思えた。その結果がこれである。しかし、翻訳を終えたあとで、この論文は今田恵による翻訳で、昭和31年に河出書房から出版された世界大思想全集哲学・文芸第15巻「ウィリアム・ジェームズの心理思想と哲学」に「情緒とは何か」の題名で収録されていることがわかった。だからこの翻訳は立派な屋根の下に仮設住宅を建てたようなものかもしれない。それでも、ジェームズの感情理論に関してこの1884年の論文に言及しているいくつかの日本の書籍（含翻訳書）は昭和31年の訳の存在にはふれていないし、その存在を知っているとしても、昭和31年刊行の本を簡単に利用できる人は限られると思われるから、今回の翻訳が役に立たないということはないであろう。また、「Mind」誌にはジェームズ自身が失念していたドイツ語論文の英文抄訳が収録されており、これには今田恵も言及していない。今回つけた試訳が本文の理解に多少とも役立てば幸いである。さらに、本文を訳出するに当たっては特に人名に関して注をつけるよう心がけたことがある。この当時のMind誌掲載論文には、現代の論文のような「引用・参考文献リスト」というようなものは準備されていない。論文の冒頭に出てくるフェリエ博士、ムンク博士がどのような人物かについては論文自体の中には手がかりがなかったが、当時の高名な学者であればMind誌の他の部分に著作や引用があるのではないかと考えた。幸い武庫川女子大の附属図書館にはMind誌第1期全巻（1巻～16巻）が所蔵されていたので、同大学文学部の安藤明人教授を通して図書館に閲覧を願い出たところ許可をいただくことができ、2007年3月の数日をかけて1876年の第1巻1号から1891年の第16巻4号まで、すべての号に目を通し、いくつか注を追加することができた。改めて武庫川女子大学附属図書館の関係者に感謝の意を表したい。

訳出上のお断りをいくつかしておく。まずfeelingという単語の処理について述べる。この単語は日本語では感覚とも感情とも訳し分けることができ、しかもこの2つの日本語から受ける印象がかなり異なる。何度か統一することを

考えたが、結局、場合場合で訳し分けることにした。したがって以下の翻訳中、感覚あるいは感情という語がとくに説明なく使用されている場合には、その原語はどちらも feeling であると考えていただきたい。本文のイタリック部分は日本語では下線部とし、大文字で表記されているものはゴシック体とした。引用符は、強調の場合も発言の引用の場合も、「」で示した。訳語で原語表記が参考になると思われる部分は（ ）で原語を示した。ドイツ語とフランス語の表記の仕方について、国際文化学部複数の同僚から教示をいただいたことを記して謝する。

この論文は web 上でも入手することができる。訳者が目を通したのは以下の 2 つの URL である。この 2 つは、スキャナーからテキストを取り込むときに生じたと思われる文字と記号のミスが数カ所、全く同じ場所にあるので、元は同一なのであろう。

<http://psychclassics.yorku.ca/James/emotion.htm>

http://en.wikisource.org/wiki/What_is_an_Emotion%3F

(URLは2006年10月現在)

What is an emotion?

William James 1884 Mind 9, pp.188-205

過去何年かの間、生理学者たちは脳機能の研究に熱心に取り組んできたが、その仕事は、脳の機能のうちもっぱら認知的、意志的な活動の説明に限定されている。彼らは、脳を感覚の中枢と運動の中枢とに分けていくうちに、この分割が、心の感覚的な部分と意志的な部分をもっとも単純な要素へと分析していく経験的な心理学の知見と、厳密に対応していることを見いだした。しかし心の審美的な部分、つまり欲望、快と苦、そして情動はこれらの研究において全く無視されて来たために、つい次のように考えたくもなるのである。つまり、フェリエ博士（訳注1）なりムンク博士（訳注2）なりに、もしもこの後者のほうの審美的な心的事実に関する脳の理論は何ですかと尋ねたとしたら、彼らは二人とも、そのようなことは考えたこともありませんと答えるか、あるいは、それについてはっきりした仮説を立てることがあまりにも難しいとわかっているのか、もしも現在抱えている多少容易な問題が完全に解決したとして、その後でなら取りかかることができるかもしれませんねと答えるか、そのどちらかではないかと。

とはいえ、現在においても、情動に関する以下の2つの説のうちどちらか一方が正しいに違いないということは確かである。すなわち、情動に対してのみ感受性を持つ、他から独立した特別な中枢（centres）があって、それが情動に関する脳の座であるという説が正しいのか、あるいは、そうではなくて、情動は、すでに場所の同定がなされているか、あるいはいまだ位置は不明であるとしても、運動と感覚の諸中枢の中で生じている諸過程にほかならないという説が正しいのかのどちらかである。もしも前者が正しいとすれば、我々は現在承認されている考え方を否定して、脳の皮質は身体のすべての感覚器と筋肉とが「投射」する表面であるだけには止まらない存在であると考えねばならない。

そしてもし後者が正しいとすれば、感覚なり運動なりの中枢における情動的「過程」が全く特異的な過程であるのか、それともそれは、すでに脳内の座として認められている中枢による普通の知覚過程に類似のものであるのかどうかについて尋ねなければならない。本論文の目的は、後者の説明がもっとも真実に近いことを示すことであり、また、情動的な脳の過程が、普通の感覚に関する脳の諸過程と類似であるというだけでなく、たとえ結びつきが多様であるとしても、まさに感覚的諸過程に他ならないことを示すことである。その結果、おそらくは複雑であろうと思われる脳と生理現象との関係に対する我々の知見を、単純化することができるであろうし、また、我々がすでに脳の説明図式(a brain-scheme)を手にしていること、また、その図式の応用範囲はそれを考案した人々が考えたよりずっと広いことをわからせてくれることになるはずである。これはおそらく、私が行おうとしている主張の主要な結果であると思われるが、あえて言えば、以下の諸ページは元々はそのような結果を得ることを目的として書かれたものではなかった。それらは、断片的な内省観察から生まれたものであって、断片がつながって一つの理論になったおかげで、その理論が脳の生理学に単純化をもたらすかもしれないという考えが私に浮かんだのであり、また以前にもまして、単純化することの重要性を確信するようになったのである。

まず最初に述べておかねばならないことは、私がここで取り扱おうとしている情動は、明白な(distinct)身体表出をもつ情動だけであるということだ。快不快や興味や興奮の感情のように、心的操作と結びついてはいるが、明白な身体的表出を結果として生じないものがあることについては、多くの読者に納得していただけるものと思う。ある種の音や線の配列、あるいは色の配列は心地よく、また他のものはその逆であるが、それらは鼓動や呼吸を速めたり、身体や顔面の運動を促進するのに十分にほどには感情が強くない。ある種の観念の連続は我々を魅了したり退屈させたりする。問題を解くことは知的な喜

びであり、問題を解けぬままに放置することはまさに知的な苦痛である。最初に述べた音、線、色の例は身体的な感覚である場合もあるが、またそれらの心像である場合もある。後者の例は、完全に観念を形成する中枢における諸過程に依存している。まとめて言えば、これらの例は、その活動がどこで生じるにせよ、神経活動の特定の形式それ自体に本来的に快と苦が備わっていることの証拠であるように見える。これらの感情については、今のところ、全く考えないことにしよう。そして我々の注意をもっと複雑な場合、つまり興味深い光景や音響、また刺激的な観念の連続に、何らかの身体的な動揺の波が伴うような場合に限ることにしよう。驚き、好奇心、歓喜、恐怖、怒り、官能的欲望、どん欲、そのほかは、そのまま、その人物がとらわれている心的状態の名称である。身体の動揺はこれらの幾つかの情動の「表明」、「表出」、「自然の言語」であると言われ、またこれらの情動それ自体は、内側からも外側からも強く特徴づけられており、標準的な情動と呼んでもよいであろう。

これら標準的情動に対する我々のふつうの考え方によれば、なんらかの事実の心的知覚が情動と呼ばれる心的な受動（affection）を喚起する、そしてこの後者の心的状態が身体を表出を引き起こす。しかし私の理論では反対に、身体の変化は喚起的事実の知覚に直接引き続いて起こり、そしてそれらの身体変化が起こるときに生じるその同じ変化の感覚（feeling）こそが情動なのである。常識によれば、我々は財産を失うと悲しくなって泣く。熊に会うと恐ろしくなって逃げ出す。敵に罵られると怒って殴りかかる。しかしここで擁護しようとする仮説によれば、この順序は間違っている。一つの心的状態が他の心的状態によって直接にもたらされることはない。まず、身体的な表出（manifestation）が二つの心的状態の間に挟まれなければならない。そして、より合理的に言えば、我々が悲しみを感ずるのは泣くからである。怒りを感じるのは殴るからである。怖いのは震えるからである。われわれが泣き、殴り、震えるのは、それぞれ我々が悲しかったり、怒っていたり、恐ろしかったりす

るからではない。知覚に引き続く身体変化がなければ、後者はおそらく純粋に認知的なものであって、ぼんやりとして生彩を欠いており、また情動がもつ暖かさを欠いている。たしかに、我々は熊を見た後で逃げた方がよいと判断するかもしれない。侮辱を受けた後では殴っても当然であると思うかもしれない。しかしその時には我々は実際には怖さや怒りを実際に感じることはできないだろう。

このように大雑把に述べてしまうと、この仮説が即座に不信の念をもって迎えられるのはまず確実である。それでも、それほど多く、また深く考えなくても、この理論の逆説的性格を軽減させ、また、この考えが正しいことを納得してもらうことができるだろう。

まず、本誌の読者であれば、生物の神経系というものが、環境の特定の様相(feature)と接触することで生じる特定の反応の集大成に他ならないことを知っているであろう。ヤドカリの無防備な腹部が、空になった巻き貝の殻がどこかで見つかることを前提としているのと同じように、猟犬の鋭い嗅覚は、一方では鹿や狐の足が存在することを暗示し、他方では、猟犬にそれらの痕跡を追う傾向があることを暗示している。神経の機構とは、身体の外側にある物質の一定の配置と、生体内組織を抑制あるいは解放する一定の衝動(impulse)とを結ぶハイフンに他ならない。メンドリが地面の上に白い楕円形の物体を見つけると、このメンドリはそれから離れることができなくなる。世話をすることをやめることができず、そこに戻っていく。そしてとうとう、それはピヨピヨと鳴きながら動きまわる小物体となって、全く異なった新しい行動の集合をメンドリの機械装置から引き出すのである。男性の女性に対する愛、ヒトの母親が赤ん坊に対して示す愛、蛇に対する憤怒、断崖絶壁の恐怖など、すべてみな同様に、世界の構成物(furniture)の断片を特定の形に並べたものが、それぞれ特定の心的・身体的反応を、慎重な理性の判断に先立って、しかも多くはそれと正反対の方向に、必然的に引き起こす例である。いずれの生き物も必ず他

の特定の何ものかに寄生して生きていることと、また、いずれの生き物も自己の神経系に刻み込まれた特定対象との関係のしるしを生存の場面において役立たせていることとは、ダーウィン（訳注3）とその後継者らの著作によって、ようやく明らかになり始めたところである。

実際、いかなる生き物も一種の錠前であって、その錠前によって守られた区域や湧水池には特定の形状の鍵があることが前提になっている。生き物はその錠前に合った鍵を身につけているわけではないが、その鍵は生物が生きていくうちに近所で見つかるということは確かなことなのである。これらの錠前は、それに合った鍵以外では開かない。タマゴは獺犬にとって何の魅力もない。トリは断崖を怖がったりしない。蛇は蛇を見て激怒したりはしない。雄鹿は人間の女性や赤ん坊に対しては何の興味も持たない。この点に関してもっと詳しく知りたければ、シュナイダー（訳注4）の動物の欲求（Der thierische Wille）を読むことをおすすめする。動物の行動が、生活環境における特定の様相の出現を非常に正確に予想して準備されたものであることを明らかにした書として、これ以上のものはない。

さて、これら神経系におけるさまざまな予想的準備（anticipations）のうちに、情動が数えられることは当然であろう。なぜなら、情動は特定の事実の知覚によって直接に喚起されるからである。象をそれまで全く見たことのない子供であっても、一頭の象が鼻を鳴らしながら突進してくるのに気がついたとしたら、怯えないはずがない。かわいらしい赤ん坊を見て喜びの感情を起こさない女性はいない。荒野においてはるか向こうに人影らしいものを見たとすれば、誰でも興奮や好奇心を感じるだろう。前にも述べたが、ここで取り扱う情動は何らかの身体運動が付随するものだけである。しかし私が述べようとすることの第一点目は、身体運動の付随は普通我々が考えているよりもずっと奥が深く、また複雑であるということである。

主として美術的視点から表出について書かれた書籍では、外から観察が可能

な情動のしるしのみが考慮されている。サー・チャールズ・ベル（訳注5）の著名な表出の解剖学は、呼吸の変化について述べている。ペイン（訳注6）とダーウィンの著作は、さらに進んで、情動にかかわる内臓的要因、つまり腺や筋肉の運動の変化と循環器系の変化の研究にも言及している。しかしダーウィンといえども、どれか一つの情動についてさえ、それについて特徴的なすべての身体的影響を枚挙しているわけではない。生理学の進歩に伴って、我々は情動に付随する身体的影響がほとんど無限に多様であり、またとらえにくいものであっても、それらを見分けることができるようになってきた。プレチスモグラフ（呼吸や血液などの流体の変化量を圧力の変化として検出する測定法：訳者）を使ったモッソ（訳注7）の研究は、心臓だけでなく循環器系全体が一種の共鳴板を形成していて、ごくわずかな意識の変化であっても、すべてがそこに反映される可能性を示している。つまり何か感覚が生じる場合には、必ず両腕の動脈にまで収縮と拡張の波が伝わると言ってもよい。腹部の血管は、より外側にある血管とは逆方向に作用する。膀胱や腸、口内の腺、咽喉、皮膚、そして肝臓、これらは強い情動状態において大きく影響されることが知られているが、情動がもっと弱い場合においても、過渡的な影響を受けていることは間違いない。いかなる情動においても、心臓の鼓動と呼吸のリズムとが主導的な役割を果たしていることは周知の事実である。一方、特段に注意されることがないために、それほどよく知られているとは言えないのだが、我々の情動状態においては、随意性の筋肉もまたつねに協同していることが同様に明らかである。一見して外見の態度になんの変化も見られない場合であっても、気分の変化に応じて内側の緊張は常に変化しており、これは筋トーンス（tone）あるいは緊張の変化として感じられる。うつ状態にあっては屈筋（flexors）が優勢である。精神が高揚していたり好戦的気分であったりすると伸筋（extensors）が主導的になる。そしてこれら身体組織の活動が影響をうけることによって生じる順列と組み合わせが多様であるために、いかに影の薄い情動であろうとも、

全体として考えると、気分それ自体が多様でありながらそれぞれに独特のものであるように、それぞれの情動に特有の身体的反響を必ず伴っているといえることができる。

それぞれの情動において変容をうける身体部分が数え切れないほど多数であるために、我々は平常心 (in cold blood) でいるときには、いかなる情動についても、そのすべての表出を統合して再生することができない。我々は随意筋ならばなんとか制御できるかもしれないが、皮膚、腺、心臓、その他の内臓を制御することはできない。ちょうど、くしゃみのまねをしても少しも本当らしくないように、真の原因となる刺激がないのに情動のまねをしようとすると、ひどく「しらじらしい」ものになってしまう。

(ここから Psychology, the briefer course, pp.246-247と同じ：訳者)

次に知っておかねばならないことは、明瞭であるかあいまいであるかという違いはあるにせよ、いかなる身体的変化であろうと、その一つひとつが、それが生じた瞬間に感じられるということである。もしも読者がこれまでこのことにまったく注意を払っていなかったとすれば、様々な情動的気分に対応して、それぞれに異なる特徴的な局所的な身体感覚を検知することができることを知って、興味を惹かれるだけでなく、驚かされもするだろう。もっとも、強い情動の流れを止めてこのような好奇心を満足させる分析を行うことは、まず不可能と言ってもよい。しかしもっと穏やかな状態であれば観察が可能であろうし、また、より弱い情動について正しいことは、より強い情動についても当てはまると考えてよいであろう。ひとの全身はくまなく識別力をもって生きている。その識別のひとつひとつがもたらす感覚の波動は、鮮明なことも不鮮明なこともあり、また快であったり苦痛であったり、あるいは本当のものかどうか疑わしいこともあるだろうが、この波動こそがだれもが必ず持っている『これが私だ』というあの感じ (that sense of personality、訳出上二重カッコを使用：訳者) をつくりだす。(身体の一部の変化の知覚という：訳者補) ほんのわず

かな事柄が（それぞれの情動という：訳者補）感受性の合成物に対して驚くほど強い影響を与えているのである。

ちょっとした困りごとがあつて心を悩ませている場合、身体の意識（身体各部から上ってくる変化の知覚：訳者）の焦点は、多くの場合ごくわずかではあるが、両目や両眉が中央に寄ってくることであることに気がつくだろう。人前で一瞬恥ずかしい思いをする場合は、身体意識の焦点は咽頭部であつて、唾を飲み込んだり咳払いしたり、あるいは軽い咳をせざるを得なくなる。その他もろもろの場合も同様である。ここでの我々の関心は細部ではなく、一般的な見解であるから、私はこの問題をこれ以上長々と論じるつもりはない。どのような身体変化といえども、生じたものは必ず感じ取られるということが認められたものとして、先に進むことにしよう^{脚注1)}。

ここで私の全理論の最重要点を述べようと思う。つまり、もし我々が何か強い情動を想像し、そしてその情動の意識からその情動に特徴的な身体の徴候の感覚 (feelings) をすべて引き去ろうと試みるならば、我々はそのあとに何も残っていないことを知る。情動を構成することができるような「心の材料 (mind-stuff)」は残っていない。そしてそのかわりに、冷たく中性的な、知的知覚が残っているだけであることがわかる。尋ねてみれば、大多数の人々は、自分の内観はこの主張が正しいことを証明していると答えるだろうが、中には

脚注 1（身体変化はすべて感じられるという主張について）

もちろん、どのようにしてそれらの変化は感じ取られるのかという、生理学的な疑問が生じる。身体変化が生じたあとに、内臓器官の感覚神経を通じて、変化が生じたという報告を脳に伝えるのだろうか？それとも、身体の変化が生じるより前に、興奮すべき身体部分へと向かおうとする神経の流れが生じたときに、それを我々が意識するのだろうか？我々が持っている証拠はすべて、前者に有利であると私は信じている。この問題はここで議論するには細部に立ち入りすぎるが、私は以下の論文でこれについて論じたことがある。"The Feeling of Effort," in the *Anniversary Memoirs of the Boston Natural History Society*, 1880 (translated in *La Critique Philosophique* for that year, and summarised in *MIND* XX., 582). G.E. Müllerの *Grundlegung der Psychophysik*, § 110も参照のこと。

そんなことはないと言ひ張る者もいることは確かである。多くの人々にとって、この質問の意味を理解することは容易ではない。ある対象が滑稽であるという意識から、笑いの感覚や笑おうとする傾向の感覚をすべて取り去るように頼み、そしてそのあとで、滑稽の感覚はどのようなものですか、その対象物が「可笑しい」という分類に属しているという知覚以外のものが残っていますかという質問に答えさせようとするれば、人々は、そんなことは頼まれてもできっこありませんよ、だって面白いものを見れば必ず笑ってしまうのだから、と言ひ張るだろう。もちろんこの依頼は、実際に面白いものを見てください、そして笑いたいという傾向を完全になくしてくださいというものではない。ある情動が完全な形で存在していると仮定して、そこからある種の感覚的要素を差し引いた上で、残った要素は何ですかと問う、純粹に思弁的な作業を依頼しているのである。私は、この問題を正しく理解している人々であれば誰でも上述の命題に同意してくれるものと思わざるをえない。心臓の速い鼓動も浅い呼吸もなく、唇の震えも四肢の無力感もなく、鳥肌も内臓がかき回されるような感覚もないとすれば、いったいどのような恐怖の情動が残るというのだろうか。そのようなものを考えることは難しい。胸中にわき上がるものがなく、顔が紅潮せず、鼻孔が拡がることもなく、歯を食いしばることもなく、行動を起こそうとする衝動もなく、その代わりに力の抜けた筋肉とゆっくりした呼吸、穏やかな表情をもった激怒状態を想像したり描いたりすることができるものだろうか？私にはできない。激怒は、いわゆる感情の表出（manifestations）が消え失せれば完全に消滅する。その代わりに生じるものがあるとすれば、それは完全に知性の領域に限定された、これこれの人物はその犯した罪に対してこれこれの罰が適当であるという趣旨の、なにか血の通わない、冷静な判決のようなものである。悲しみの場合はどうであろうか。涙がなかったとしたら、すすり泣きが無かったとしたら、心臓が締め付けられる感じがなかったとしたら、胸の痛みが無かったとしたら、いったい何なのだろうか。これこれの状況は遺憾でござい

ますという、感情の欠けた (feelingless) 認知、ただそれだけである。どの情緒 (passion) も同じことである。肉体から切り離された人間の情動など、存在しない (a nonentity)。私は、身体的表出を欠いた情動がものごとの本質と矛盾しているとか、純粹精神は必然的に冷酷な知性を持った生命であるに違いないとか述べているのではない。私が主張しているのは、我々にとって、身体的感覚から分離された情動はありえないということだ。私自身の状態をより綿密に見ていけば行くほど、私が持っている気分や感情や情緒はどれもみな、実際のところは、我々が普通に (情動の：訳者補) 表出とか結果と呼んでいる身体的変化から構成され、あるいはできあがっているということに納得がいく。また、私がもしも肉体的な意味で無感情 (corporeally anaesthetic) になるとしたら、私は感情の生活から排除され、厳しさも優しさも意味をもたず、単に認知的あるいは知性的な形態の存在になってしまうに違いないことがわかる。このような存在は、昔の賢者たちの理想ではあったかもしれないが、数十年前に感性 (sensibility: 倫理芸術に対する判断力：訳者) への尊敬が復活した後で生まれた人々にとってはあまりにも非感情的 (apathetic) であって、熱心に追い求められるものではないのである。

(ここまで Psychology, the briefer course, pp.246-247 と同じ：訳者)

しかし、もしも情動が、我々が「対象」と呼ぶものの反射的な身体効果の感覚に過ぎず、さらにその効果が神経系の、その対象に対してもつ生まれつきの適応によって生じたものであるとするなら、我々は即座に以下のような反論に直面するだろう。文明の恩恵に浴している人々の情動の対象が、人々の神経系が生まれつき適応している対象であると考えるのは非常識であろう、と。ほとんどの恥辱や多くの侮辱は、純粹に習慣的なものであって、社会環境によって異なるのである。恐怖や欲望の多く、憂鬱や後悔の場合もまた、多くは同様に習慣的である。そうであるとする、少なくとも、恥辱、欲望、後悔その他の諸観念は、身体の変化が目覚めさせられるよりも以前に、まず教育と連合とに

よって、これらの習慣的対象に結びつけられてきたものであると考えるしかないであろう。そしてもしもこれらの場合に、身体変化が、上記諸観念を生み出すのではなくて、上記諸観念に引き続いて生じるのだとすれば、そのほかの情動の場合にも同様のことが成り立つのではないか、と。

この反論について徹底的に議論をするとすれば、我々は純粋に知的な美学研究の深みへと歩みを進めていかねばならないだろう。しかしここでは数語で十分である。我々はここで、上記の批判が情動の観念と情動それ自体とを区別し損なっていることについて述べようとするのではない。よく知られた進化の原則を思い出せば事足りるだろう。つまり、環境内に一定の特定の様相(feature)が存在するときに、ある種の力が有用に働いたというまさにそのことによって動物においてその特殊な力が固定されるに至ったとすると、もともとその力を行使するにも保存するにも何のかかわりもなかった他の環境の様相が存在する場合においても、その力が役立つということがありうる。力を解放する神経系の傾向がいったん存在すれば、予測することのできないいかなる種類の事物であっても、その引き金を引き、その効果を引き出すことができるだろう。これらの予測し得ない事物の中には人が考案したさまざまな習慣もまた含まれうるが、それは心理学とは全く無関係である。さて、私にとってもっとも重要な環境要因は、人間そのものである。私に対する他者の態度を意識するというこの知覚は、私の恥辱や憤慨や恐怖の多くを解放する。このような意識が極度に感受性の鋭いものであることは、少しでも誰かに見られていることに気がつくと、その意識によって我々の身体に変化がもたらされるということによって明らかである。どのような人であっても、公の会合で演壇に向かって進む場合に、自宅で自室内を歩く場合とまったく同じ筋肉の使い方(innervation)をするはずがない。公的な会合において話をする場合に、身体組織の興奮のない人はいない。いわゆる「舞台恐怖症」は、このまったく非合理的な個人的自意識が極端になったものであるが、内心では他者の自分に対す

る態度などなんの関係もないのだと確信していたとしても、多数の見知らぬ人々の目が自分に注がれていることに気がついたとたんに、誰しも、程度の差はあれそうなるものなのである^(脚注2)。そういうわけであるから、人々の態度が自分に対して好意的であるか否かということがわかると、さらに強い情動が生じてくることは当然であろう。原始社会においては、「よい」は一切れの牛肉を手渡すことであり、「わるい」は頭に一発くらわすことであるかもしれない。我々がいる「文化的な時代」であれば、「わるい」は路上で切りつけることであり、「よい」は名誉学位をくれることかもしれない。つまり、私にその意図、つまりこころ (animus) さえわかれば、行為それ自体が何であるかは、ほとんど重要ではない。このこころこそが情動を引き起こす知覚である。私のように文明化した人間の場合には、人為的な社会の一つが自分をどう処遇しているかがわかると、それが私に強い身体的動揺を引き起こすのであるが、これは、未開社会において戦いで捕虜となった者が、自分がこれから食べられてしまうのか、それとも勝った部族の一員として迎えられるかのどちらであるかを知った場合に生じることと同じであろう。

しかし、この異議は片づいたとしても、より普遍的な疑念が持ち上がってくる。つまり、情動あるいは情動の観念に先立って、一種の直接の身体的影響によって、特別な知覚が、広範囲にわたる身体的効果を本当に引き起こすというこの仮定に、何か証拠はあるのですかという疑問である。

(ここからPsychology, the briefer course, p.243と同じ：訳者)

これに対する唯一の回答は、確かにそのような証拠がありそうですというくらいのことである。詩の朗読やドラマ、あるいは英雄伝などに耳を傾けている

脚注2 (他者に見られているということについて)

ついでに言えば、この個人的な(個人内でその個人自身に関する：訳者)自己意識はまったく身体的な出来事であって、主として我々自身の態度に関する意識であるように思える。他の情動の場合と同様に身体の状態に反応し、態度の変容をもたらす。多くの男性においては一種のぎごちなさが、子供達の場合にはよく見かける身をよじるような動作が、そして女性の場合には上品なはにかみのポーズが生じる。

とき、突然に波に洗われたかのように皮膚がぞくぞくしたり、ときおり不意に胸がいっぱいになったり、涙がこぼれたりして驚かされることがある。音楽の聴取においても、同様のことがさらに顕著に生じる。もしも森の奥で突然に何か黒いものがうごめいているのを見たとすれば、危険であるという明確な観念が生じる以前に、即座に心臓がドキッとして、息を飲む。友人が断崖の端に近づいたとすれば、我々は彼が安全であることをよく知っており、友人が崖から落ちることをはっきりと想像したわけでもないのにもかかわらず、よく知られているように「背筋がぞっと」して、後ずさりする。著者自身が7歳か8歳のころ、馬が血を流しているのを見て自分が気絶したということに驚いたのをよく覚えている。血がバケツにためられており、そこに棒が一本さしてあった。そしてもし記憶の間違いでなければ、私は棒をかき回し、子供っぽい好奇心以外にはなんの感情(feeling)もなしに、そこから血がしたたり落ちるのを見ていた。すると突然、目の前が暗くなって耳鳴りがした。それきり何も覚えがない。当時の私は血を見て気が遠くなったり気分が悪くなったりするなど聞いたことがなく、それに血に対する嫌悪はほとんどなかった。血が危険のしるしであるという考えもなかったし、幼い時であったので、なにゆえにこのような桶一杯の赤い液体の物理的存在が恐ろしいほどの身体的効果を引き起こすのかについて、疑問を禁じ得なかったことをよく覚えている。

(ここまでPsychology, the briefer course, p.243と同じ：訳者)

よく研いだ二本の鋼のナイフを直角に交差させて前後に動かすことを想像しよう。我々の全神経組織はそのような思考に「興奮する。」しかしそこに、不快な神経的感觉それ自体を別にすれば、いったいどのような情動が生じうるだろうか。それとも並大抵ではない本物の恐れが生じるものだろうか？情動を生じさせる元手となるものは、ナイフの刃が直接に引き起こす、意味のない身体的効果である。観念的な情動が身体の徴候に先立っているように見えるものの、実はその情動は身体の徴候それ自体の表象にすぎないということが少なくない。

このナイフの例はその典型である。血を見て失神したことのある者であれば、外科手術の準備を見るだけで心臓がへなへなとなり、不安になりますと証言するかもしれない。このような人は一定の感覚がくることを予期しており、そしてこの予期が感覚の到来を引き起こすのである。病的な恐怖の症例であるが、自分を支配しているのは他ならぬ恐怖それ自体に対する恐怖であると、患者が告白したという例がある。ベイン教授が「おだやかな情動 (tender emotion)」と呼ぶ種のものにおいては、情動が生じるよりも前にまず適切な刺激が直接に想定されねばならないはずであるが、それでも、ときには情動の徴候について考えるだけで、同様の効果が生じうる。感傷的な人々の場合、「あこがれ」について考えると本当に「あこがれ」が生じるだろう。また、粗大な情動の例は別にするとしても、母親というものは我が子を抱きしめることを想像しただけで、親としての愛情がほとばしることがある。

このような場合、我々は、効果、あるいは表出 (manifestations) と呼ぶものと同時に情動が始まり、同時に終わるものであることを明らかに見てとるのである。情動は、その表出が現前しているという感覚、つまり表出の観念を除けば、いかなる心的状態も所有していない。従って、この表出こそが情動の素材のすべてであり、その総体と実質であり、商売道具 (stock-in-trade) ともいうべきものである。これらの例は、すべての情動の例において、表出の感覚が、情動を構成するものとして、我々がふつうに考えているよりもずっと大きな役割を果たしているかもしれないということをわからせてくれるのである。

もし我々の理論が正しいとすれば、当然の結果として、いかなる情動についても、そのいわゆる表出 (so-called manifestations : なぜ表出にいわゆるがついているかという、表出という言葉には、すでに内部に何かが存在していて、それが表れてくるのだという意味合いがあるからだろう。ここではもちろん、「表出」のほうが先立つのである : 訳者) を随意的に活性化すれば、その情動そのものが生じるに違いない、ということになろう。もちろんほとんどの

情動については、これをテストすることはできない。なぜなら表出の多くは我々が意志的に制御することのできない内臓における表出であるからだ。それでも、検証に限界はあるものの、体験によって十分にこのテストを裏付けることができる。逃走によって恐怖（panic）が強められること、悲しみや怒りの徴候を抑えずにそのまま表出することによってこれらの情緒それ自体が強められることは、誰もが知っている。すすり泣くたびに悲嘆の度合いは強くなる。泣けば泣くほど悲しみはますます強くなる。これは、最終的にこの機械装置がへとへとになって力を失い、静かになるまで続くのである。怒りの場合、発作的な表出を繰り返すことによって怒りが「頂点に達する」こともよく知られている。情緒の表出を断念すれば、情緒は終息する。怒りを爆発させる前に十数えよ。そうすれば怒るということが滑稽に見えてくる。

口笛を吹いて勇気を奮い起こすというのは、単なる比喻ではない。逆に、一日中ふさぎ込んだ姿勢で、ため息をつき、何を言われても暗い声で返答していると、憂鬱はいつまでも続く。精神修養においてこれに勝る教訓（precept）はないのであるが、経験のある者なら誰でも知っているように、自分自身の中にある好ましくない情動的傾向にうち勝とうとするなら、まずは感情を押し殺して、変えたいものと正反対の傾向の外向きの運動を根気強く練習することである。これを続けていれば必ず不機嫌や抑鬱が弱まって、そのかわり、真のほがらかさと穏和さがやってくる。眉が平らになり、目が輝き、骨格の腹側ではなく背側部が収縮する。音声は長調となり、にこやかに挨拶をかわすようになる。それでも心が解けて行かないとすれば、その人の心臓はよほどガチガチに凍っているに違いない。

この法則に対しては唯一の明白な例外があるが、それは現実のものではない。確かに、中には情動の表出や活動が非常に強いために、「おしゃべりをやめれば、もっとよく感じ取ることができるのでしょいうに」と言いたくなるような人々がいる。また、いざというときに現れる情緒のエネルギーが爆発的であって、

それは情緒の休止期間中にエネルギーをビン詰めしているのではないかと思われるような人たちもいるかもしれない。しかしそれらは普通からは外れた性格というべきであって、しかもそれぞれのタイプの内部では、前節で述べた法則が当てはまっているのである。感傷的な人々にあっては、感情表出が「ほとばしる」ことのほうが普通である。このような「ほとばしり」をせき止めると、ある程度までは「本当の」表出があらわれてくるが、たいていの場合は、単に元気がなくなるだけである。反対に、重苦しく気むずかしい「休火山」のような人では、情緒の表出を好きなだけ押さえつけたままにしておいても、吹き出し口がないのであれば、情緒は終息してしまう。しかし爆発してもよいと思えるようなことがまれに積み重なると、情緒はだんだん大きく成長していく。

つまり、事実上この法則には例外がないということは確かである。悲しいときに泣くのを我慢するのはよくないとか、怒りを抑えねばならないときには思っていることを口に出すだけでも気持ちが落ち着くというのは例外ではないかと言われるかもしれないが、これらもまた、規則から一見外れているように見えるだけで、実は規則に従っている。いかなる知覚も必ず何らかの神経作用を結果として生じさせる。その神経作用が普通の情動表出であるなら、それはすぐに消費されるから、平穏があとに続くのが普通である。しかし、もしもこの普通のことが何らかの原因で阻止されたとなると、情緒の流れは、場合によって、他の経路に侵入し、そこで異なった作用や、さらによくない結果を生み出す可能性がある。義憤のほとばしりに復讐の念がとってかわるかもしれない、涙を流したい気持ちが潤いのない怒り（dry heat）によって飲み尽くされるかもしれない。あるいはまた、ダンテが言うように心を石に変えてしまえば（訳注8）、涙も激情の嵐も、心地よい安堵にかわるかもしれない。我々が子供達に情動を抑えなさいと教えるのは、情動をもっと感じなさいということではなく、全くその反対であり、もっと考えなさいということなのだ。なぜなら、ある程度の神経の流れが下方の領域から方向を転じて、それが脳の思考経路の活動を強め

るに違いないからである（脚注3）。

身体の徴候が、感じられる情動（felt emotion）に先立つという理論を擁護する最後の重要な主張は、この理論によって病理学的な症例と普通の人々の場合とを共通の図式で説明することが容易になるということである。どの精神病院においても、われわれは、動機を完全に欠いた恐怖、怒り、憂鬱、あるいはうぬぼれの例を見いだすことができるし、また同様に、どう考えてもそこにあるはずのない、動機のない無感動状態が持続する例を見ることができる。前者の場合、神経機構が特定の情動の方向に過度に「不安定」であるために、それがどのような刺激であっても、たとえ不適切な刺激であっても、神経機構のバランスを乱し、不安定な方向に押しやってしまうことになり、その結果、情動の心的本体（the psychic body of the emotion）の元であるところの特定の感覚複合物（the particular complex of feelings）をつくり出すことになるのだらうと推測しなければならない。さて、ひとつ特殊な例をとろう。深い呼吸ができず、鼓動が不規則で、「前胸部不安（precordial anxiety）」として感じられる上腹部（epigastric）の独特の変化があり、うずくまるような姿勢をとりたい、じっと座っていたいという気持ちが押さえきれないという症例である。おそらくは現在には知られていない他の内臓変化も伴っているであろうが、これらのすべてが一緒に、勝手に生じてくる。これらの変化の組み合わせに対して患者が感じる感覚こそが、恐怖（dread）の情動であって、この人物は病的恐怖（morbid fear）として知られている病気の患者なのである。私の友人

脚注3（情動エネルギーが思考経路にあふれることについて）

これは、外傷性であろうと内部的損傷であろうと、あるいは病気に起因する栄養欠乏であろうと、脳に損傷がある場合に生じることとは正反対である。脳に損傷がある場合、脳皮質の浸透性（permeability：さまざまな活動を支配するということか？：訳者）が低下し、観念化の経路（ideational channel）を介して興奮を脳内の左右側方に伝播させる力が以前に比べて弱くなり、かわりに下部にある身体各部の組織への道筋をとりやすくなる。その結果、我々はほんのささいな刺激に対しても涙を流し、声をあげて笑い、かんしゃくを起こすが、これに比例して論理的思考、意志的な注意、そして決定の力が弱まるのである。

の一人は、すべての病の中でもっとも悲惨と言ってもよいこの発作に時折襲われるのであるが、彼が言うには、彼の場合には全症状が心臓と呼吸器の部位に集中しているようである。発作が生じたときに彼が行う努力は主として、なんとか呼吸をコントロールし、心臓を落ち着かせることなのであるが、深呼吸ができるようになり、立っていられるようになると、その恐怖は、まさにそのことによって (ipso fact)、彼から離れていくと言うのである^(脚注4)。

ブラシェ (Brachet) の患者の一人は、彼女の症状がこれとは反対の状況、情動が感じられないこと、であることを彼に説明してる。これはこれまでもしばしば引用されているが、ここでも引用する価値があるだろう。

「わたしは相変わらずずっと苦しんでおります。一瞬といえど心の安らぐときがありません。人間らしい感覚がないのです。幸せて心地よい生活を営むのに必要なものすべてに囲まれておりますのに、喜びや感覚の能力が欠けているのです。どちらも全く不可能になってしまいました。何をするにつけても、子供達をやさしく抱きしめるときでさえ、苦しみしかありません。子供達にキスをしてやりますが、子供の唇と私の唇の間になにかが挟まっているようです。

脚注 4 (身体的変化の少ない強い情動)

病的な恐怖であって、他覚的な心臓の変化がそれほど大きくない症例は確かにある。しかしそれらは、我々の理論とは反対のことを証拠立てるものではない。なぜなら、皮質の諸中枢は通常は恐怖を、心臓をはじめとする諸器官の感覚の複合体として知覚するのであるが、脳に障害がある場合、まず最初に中枢のみが興奮させられることがある。このためにあたかも身体の変化があるような幻覚を生じ、この恐怖の幻覚は、結果的に、比較的平静な拍動その他と共存することになる可能性がある。可能性があると表現するのは、これが事実であることを証拠立てる観察例について私がよく知らないからである。トランスとかエクスタシーと呼ばれる恍惚状態も似たような例であるが、普通に見る夢の場合も同じことである。これらの場合、主観的な感覚は非常に生き生きとしているが、目や耳の感覚もなければ、さらに内臓的・情動的な類の感覚もない。つまり純粹に神経中枢の活動の結果であって、末梢は完全に平静なままである。このような場合に、主観的な感情の強さが中枢の混乱に要するエネルギーの量によるのか、あるいは単に意識の場が狭くなっていることによるのかという問題については、我々の問題とは無関係である。病院における鬱病者の場合、意識の場が狭くなっていることが多い。

このぞっとするような何かが、私を世の中の喜びのすべてから隔てているのです。私はまともな存在ではないのです。日常生活の普通の機能や行為は確かに残っております。でもそのいずれにも何かが欠けているのです。つまり、当然にあるべき感覚もなければ、あとに来るはずの快感情もないのです... 私の感覚器官のいずれもが、この私自身のそれぞれの部分が、言ってみれば私から切り離されていて、もはやどのような感覚も持てなくなっているのです。この感覚不全（impossibility）は私の頭の前のほうにあるように感じられる空虚が原因で、そのせいで全身くまなく感受性が低下しているためだと思われるのです。と申しますのも、私には、私が触るものに、本当には触っていないのです... 触ったものの温度の違いは確かに肌で感じ取れます。でも息をしても、確かに空気を吸っているという実感が無いのです... こんなことはどれもごく些細なことかもしれませんが、その結果は恐ろしいもので、ほかには何の感覚もなく、なんの喜びもない。感覚や喜びに対する必要や欲求はありますから、そのことが、他の人には理解していただけない苦しみとなっているのです。運動の機能にはまったく欠けるところがありませんのに、それから生じる感覚、あとに来るはずの喜びが失われているのです。足が冷たいときは暖めますが、でも暖かさという喜びは得ることができない。食べものの味は皆わかるのですが、そこに何の喜びもないのです... 子供達も立派に大きくなって、健康でございます。どなた様もそうおっしゃいます。私にもそれはわかります。でも喜びは、心の中で感じるはずの満足感、得られないのです。音楽は私にとってなんの魅力もなくなりました。昔は大好きだったのですが。娘は演奏が上手ですが、私にとってはただの騒音です。一年前は演奏家の指が奏でるちょっとした旋律にもわくわくしておりましたのに、あの身震いするような感動も、ついほろほろと涙がこぼれるような全身の感覚も、もはや存在しないのです^(脚注5)。」

脚注5（セマル氏による引用）

Quoted by Semal: *De la Sensibilité générale dans les Affections mélancoliques*, Paris, 1876, pp. 130-135.

他の患者の中には、氷の壁に閉じこめられている、あるいはインドゴムの被覆におおわれているようで、感受性が密閉されているためにどのような印象も内部に入ってくることができないと述べるものもある。

我々の仮説が正しいとしたら、我々の心的生活がまさに文字通り、肉体の組織と一緒に編み上げられているということについて、これまで以上に深く理解することができるだろう。歓喜、愛情、欲望、憤慨、自尊心など、感情(feelings)であると考えられているものはみな、快と苦という最も粗野な身体感覚と同じ土壌に生まれた果実である。本論文のはじめに、このことは「標準的な」情動と呼ぶことに同意したものについてのみ確証されるだろうと述べ、また、身体的変化の徴候を欠いているように見える内的な感受性についてはここでは取り扱わないと述べた。しかし、この論文を終える前に、この後者の感情についても二三述べておくほうがよいであろう。

読者が覚えておられるように、それらの感情とは道徳的、知的、美的な感覚である。音・色彩・線の調和、論理的一貫性、目的適合性等々には、その表象形態それ自体の中に深く根ざしているように見える快があり、われわれはその快を感じるのであるが、その際には、脳よりも下位の部分から押し寄せて来る反響の影響はまったく受けていない。ヘルバルト(訳注7)学派の心理学者達は諸感情(feelings)を、観念が配列される仕方に基づいて区別しようとした。旋律や描画の場合と同様に、幾何学的証明は「美しく」、正義の行いは「すばらしい」と感じられるかもしれない。しかし前者における美しさやすばらしさは純粋に官能的感覚(sensation)上の問題であるのに対し、後者においては官能的感覚とは何の関係もない。ということは、我々は、あるいは少なくとも我々のうちの幾人かは、完全に知的な(cerebral)形態の快と不快を持っている、あるいは持っていると考えられるということになるが、このような快不快は、これまで分析を進めてきたいわゆる「標準的な」情動とは、その生成の仕

方において、あきらかに異なっている。これまでの論証に納得がいかなかった読者は、これ（知的な快不快が存在し、それはいわゆる情動とはメカニズムが異なること：訳者）を認めたことで元気づいて、それならばこれまで述べてきたことをすべて放擲するのだなと思うかもしれない。そのような人々なら、次のように言うことだろう。音楽の知覚が、そしてまた論理的観念が、どちらも直接に一種の情動的感情を喚起することができるのだとすれば、いわゆる「標準的な」情動の場合にも、対象物の存在や出来事の体験によって刺激されるのだから、情動的感情は等しく直接的に生じ、そしてまた身体の出発点というようなものは後から生じて付け加えられると考えたほうがずっと自然ではないか、と。

しかし純粋に知的な情動というものについて冷静に考えてみれば、このような（知的快不快と標準的情動との：訳者補）同類化（assimilation）には根拠のないことがわかる。もしも純粋に知的な情動において、何らかの身体的反響が知的な感覚と結合していないとしたら、また、面白い動きをする機械装置を見て笑ったり、正義の行為にわくわくしたり、すばらしい音楽にぞくぞくしたりするのでないとしたら、我々の心の状態は他でもない、正しいかどうかという判断と連合しているのである。このような判断は、真実にかかわる諸意識のうちに分類されるべきものである。すなわちそれは認知的行為である。しかし実際には、知的な感情が身体的変化を伴わずに存在することはできない。身体の共鳴板は実際に作動しており、しかも注意深く内観すればわかるように、普通に考えられているよりもはるかによく活動しているのである。それでも、特定の反応に慣れているために、情動に対する感性が鈍らされて、その上、趣味とか判断というものを磨きあげてきたために、我々は知的情動というものを手に入れたのである。もしそういったものであるなら、純粋で汚されていない情動と呼ぶことができるかもしれない。このような情動は無味乾燥で弱く、燃えるような熱情に欠けており、いわば専門的批評家の心の中にあるようなもので、

我々が最初に考えた「標準的な」情動とは全く別物であるというだけでなく、この両者が完全に異なっているのは、身体の共鳴板が、ある場合には振動し、別の場合には音を立てないという事実のせいであることを疑わせる。「それほど悪くない」という表現は、味覚の優れた人においては、最高級のほめ言葉になるようだ。「私を不快にさせない」(Rien ne me choque)という言葉は、新しい曲に対するショパンの最高級の賛辞だったという話である。もしも感傷的な凡人が専門家の心の中に入ることを許されたとしたなら、その心の中にあるのが、冷たく、弱く、人間味に欠けた、賛成か不賛成かというだけの動機であることを見いだして、おそらく戦慄を感じるに違いない。専門家からすれば、壁面上に絵を飾る好点を見いだす能力は絵の内容にまさる。ばかげた言葉遊びのおかげで詩らしさが保持される。ある楽曲において全く意味のない音の運びは、他の曲の中でいかに「表現力」に富んでいようと全く評価されない。

私はベニスのアカデミーで、凍てつくような二月に1時間以上も、有名なティツィアーノの「聖母被昇天」の前に座り込んでいたイギリス人のカップルに出会ったのを覚えている(訳注10)。寒さに追われて展示室から展示室へと移動した後で、もう絵はおしまいにして急いでお日様のあるところに行こうと決めたのだが、立ち去る前に、この二人がどのような超越的感受性を授かっているのかを知りたくて、そっと近づいたのである。漏れ聞こえてきたのは女性のつぶやきだった。「彼女の顔の表情は本当はこんなことはしたくないんです(deprecatory)という感じだわね。自己拒絶(self-abnegation)しているのね。彼女があずかっている栄光にはそぐわない感情じゃないの！」彼らの正直な心臓は、ティツィアーノの気分を害すること間違いなしの、まがいものの感傷によってずっと暖められていたのだった。ラスキン氏(訳注11)はどこでだったか、恐ろしい(彼にとっては、原文カッコ書き：訳者)告白をしている。宗教的な人々は、原則として、絵画には興味がない。そしてもし絵画に興味がある場合は、一般に、最良のものではなく、最悪のものを好むというのである。

その通り！どの芸術においても、またどの科学においても、正しいかそうでないかということに関する鋭い知覚が存在する。そしてその結果として、情動的興奮と身震いとが引き続くのである。これらは別々のことであり、一つのことではない。前者は、専門家の領分である。後者には専門家には感じることでできない身体の動揺が付随しているが、批評的判断力など皆無と言ってよいまぬけ（Crétins）や無教養の俗物によってのみ最大限に経験されるものである。科学の「驚異」についてたくさんの啓蒙的な書物が書かれているが、それらは実験室の住人にとっては「キャビア」のようなものでしかない。認知と情動とは、この最後の隠れ家（実験室？：訳者）においてさえも引き裂かれているのだが——この認知と情動の対立は、太古から続いている精神と肉体の間の相克の一つの様相ではないと、誰に言えようか——この闘争においては、どちらの陣営も敵を全滅させることなど決してできないのであるが。

最初の問題であった脳の生理学に戻ることにしよう。脳の皮質には、それぞれの特長感覚器官（special sense-organ）における、皮膚の各部分における、一つ一つの筋肉、一つ一つの関節、そして一つ一つの内臓の変化を知覚する中枢があり、そしてそれ以外にはなにもないと仮定しよう。この場合でさえも、情動の過程を完全に表象することができる図式を、我々は持っている。外部の対象は感覚器官を刺激し（fall on）、適切な皮質の中枢によって統覚される（apperceive）。さもないければ、皮質の中枢は何らかの方法で刺激され、その同じ対象物の観念を生じると言ってもよい。電光石火のスピードで、反射の流れはあらかじめ定められた道筋たどって下方に進み、筋肉、皮膚、内臓の状態を変える。そしてこれらの身体変化は、皮質の無数の特定部位において、もとの外的対象がそうであったように統覚され、意識における統覚と結合され、その統覚を単に統覚された対象から情動的に感じられた対象へと変成する。ここに新しい原理など何一つ付け加えられない。ごく普通の反射回路と、誰でもが多少の違いはあってもその存在を認めている局所的な中枢以上のものは、何一つ

仮定されていない。

この仮説の正しさをはっきりと証明することが困難なのは、決定的反論が困難であるのと同じだということは認めなければならない。身体の内外の完全な知覚麻痺 (anaesthesia) であって情動的無感動 (emotional apathy) 以外には身体や知能の変化を伴っていない患者がいれば、決定的な証拠とまでは言えないまでも、我々が提案した見解が正しいことを示す、かなり強い確信を与えてくれるだろう。その一方で、このような症例においても強い情動的感情が保たれているとすれば、我々の考えは完全に覆えることになるだろう。ヒステリー性の知覚麻痺は、この問題を解決するのにとても十分とは言えない。一方、身体組織の病気によって生じる完全な知覚麻痺の症例はめったにない。有名なレミギウス・レイムスの症例では、情動状態については何も報告されていないが、心の中にあらかじめ存在している疑問なしには何事も決して気づかれないというのが通例であるから、記述がないからと言って、それが正常であったと考える根拠にはならない。ゲオルク・ヴィンター博士 (Georg Winter) は最近、似たような症例を報告している^(脚注6)。私の質問に対し、博士から以下のような返事をいただくことができた。「この症例については、ここ1年半ほど私は見ておりません。しかし私に言える限りでは、この男性はある種の心的な無力と怠惰を特徴としています。彼は物静かで、全般的には粘着器質 (phlegmatic) の持ち主でありました。彼は短気であるとか怒りっぽいということもなく、地味に農作業をし、商売のことや家事は他の人々にまかせておりました。つまり彼は、自分の仕事以外のことには興味のないおとなしい田舎の人という印象の人物でした。」ヴィンター博士は、この患者を診るに当たって主たる目的からすれば「副次的」(nebensächlich) であったから心的状態に

脚注6 (ゲオルク・ヴィンターの症例)

"Ein Fall von allgemeiner Anæsthesie," *Inaugural-Dissertation*. Heidelberg, Winter, 1882.

は特に注意をしていなかったと付け加えている。というわけで、私の博士に対する質問は私が期待していた類の答えに関しては、役に立たなかったということと付け加えねばならない。

もちろん、この症例が何かを証明しているということではないが、精神病院の医者や神経の専門家が、知覚麻痺と情動的無感動の関係についての系統的な研究を始めてもらえればと思う。もしもここで示唆した仮説がはっきりと確認されたり、あるいは間違っていることがわかるとすれば、それは、それらの専門家の手によってであるに違いない。なぜならそのような専門家だけがデータを所有しているからである。

追記：本論文の原稿を編集者に送付する際に、言い訳にもならないのであるが、*Ziemssen's Deutsches Archiv für klinische Medicin* xxii., 321 に掲載されたシュトリンベル教授の、完全な知覚麻痺に関する驚くべき症例の論文があることを忘れていた。これについては、その出版の時点で報告を読んでいた。(Mind誌編集者の注記：Mind X., 263 には *Pflüger's Archiv* からの翻訳が掲載されている)(これについては訳を付録としてつけた。訳者)私の信じるところによれば、この論文には我々の検証を補完してくれる、この種の医学文献にはこれまで載っていなかった事例がある。原著は多くの点で重要なものであるが、中でも、靴職人の15歳の徒弟の例が重要である。この患者は、片目と片耳だけを残して、内側も外側も、完全な知覚麻痺であるが、ベッドを汚したときに恥じらいを示し、また以前は大好きであった料理が目の前に並べられた折りに、もはやその風味を楽しむことができないと考えて悲しみを示したという。シュトリンベル博士はこの患者の心的状態には特に関心を払わなかったようであったが、これらは我々の理論にとって重要なことであったので、私は彼に手紙を書き、この理論の主要部分を簡単に説明した上で、上述の悲しみや恥じらいが少年の心の中の本当の感情であったのか、それとも特定の知覚によっ

て喚起された反射的な表出であって、その表出は、観察者には気づかれるものの、少年自身は感じていない類のものであるのかについて、博士がどう思うかを尋ねた。

シュトリンベル博士から非常に丁寧な手紙をいただいたので、その主要部分を私が翻訳したものを以下に示す。

「私の知覚麻痺患者（Anæsthetiker）の観察においては、あなたの理論が必要としておられるような特殊な感覚についての調査は残念ながらなされてはおりません。しかし、以下のことは申し上げられると思います。患者は決して情動的感情（affections）を完全に失っていたわけではありません。私の論文で言及した悲しみと恥じらいの感情に加えて、彼はたとえば怒りを示し、しばしば病院の職員と口論をしていたことをはっきりと憶えています。彼はまた、私に罰を受けるのではないかと恐怖を表出したこともあります。というわけで、私の症例があなたの理論の確かな裏付けになっているとは考えられません。一方、この症例があなたの理論を否定するものだとも断言はできないでしょう。なぜなら、私の症例は中枢的に条件付けられた知覚麻痺（ヒステリー性の知覚麻痺と同様のもの）の一例であったことは確かで、従って外に向かう行動の印象（そのまま訳すと「外向き印象の行動」：訳者）は、この患者の場合、障害されていなかった可能性があります。」（「ヒステリー性の知覚麻痺と同様のもの： perception-anæsthesia」を知覚性知覚麻痺と訳したのでは意味がわからないのでこのように訳出：訳者）

率直に言って、この最後の考察は当を得ていないように思われるので、ひょっとすると私の手紙があまりにも短かったか、あるいは表現があいまいだったかのせいで、私の考えが十分に相手に伝わらなかったのかもしれない。というのは、シュトリンベル博士の返事には、この少年において情動の外側への表出があったということ以外には何の言及もないからである。以下のようなことは考えられないだろうか。それまでこの少年に会ったことのない者がこの少年を観

察する機会を持ち、彼が飲食し、また他の自然な欲求を満足させる様を見たとしたら、この少年が、実は私は視覚と聴覚以外には自分のしていることに何の感覚もないのですと告白しない限り、この観察者は少年が飢えや渇きその他の感覚を持ちあわせているものと考えるのではなかろうか。シュトリンベル博士は彼の患者に内観報告を求めることはせず、またこの少年も自発的にこの種のことを報告するような類の患者ではなかったとすれば、博士は感情と、それに付随する習慣的な動作とを区別することができなかったわけであり、従って、習慣的運動の存在をもって感情が存在することの証明と間違って解釈したということも、ありえないとは言えないのではなかろうか。このような間違いはもちろんありうるわけであるが、ここでは私は博士自身の、この症例は私の理論を否定するものではないという言葉を繰り返しておきたいと思う。もし同様の症例を持つ患者があらわれた場合には、内的な情動状態が恥らいや怒りその他の情動の外側への表出に伴っているかどうかを調べてみるべきであろう。そしてもしもこの患者が、以前の正常な時に感じていたそれぞれの情動の感情と全く同じ気分を今でもはっきりと認識するということになれば、私の理論が間違っているのだ。しかし、私にとっては、その患者が以前と全く同一の感情を持っているとは考えにくい。なぜなら、身体の反響版が欠けているために、必然的にその量が幾分かは減少するからである。シュトリンベル博士の患者の場合、少年が通っていた学校の教師によれば、彼が知覚麻痺である期間、知的欠陥が見られたという。この知的欠陥が生じたのは、少年の情動的生活のすべてであるとは言えないにせよ、非常に重要な感情の多くが失われた結果、彼の一般的な知的活動性が影響を受けたことによるものかもしれない。次に完全な知覚麻痺の症例が現れたとすれば、この症例から情動に関する最大限の知識を引き出そうと望む人々は、私のこの論文にある知見を心に留めた上で、患者に問診するべきであろう。我々は、このような仮説から始めることによって、また制約や差し引きで仮説を修正することによって、明確な仮説を全く持たない場合に

比べて、純粋に心的な情動をはるかにによりよく定義することができる。とすれば、この論文が主張する理論は厳密に言えば間違っているとしても、出版する価値はあるということになろう。この論文を書いていくうちに、私自身はこの理論が正しいことをほとんど信じるに至ったということは、是非述べておきたい。(本文終わり)

訳注

1. フェリエ博士

Ferrier, David (1843-1924)

スコットランド出身の生理学者。著書「脳の諸機能」(The functions of the brain, 1876)の詳細な紹介がMind 2巻にある。「脳病の局在」(The localisation of cerebral disease, 1878)という著書の紹介がMind誌4巻に、また「脳の諸機能第2版」(The functions of the brain, 2nd Ed., 1886)の紹介が12巻にある。

2. ムンク博士

Munk, H. (1839-1912)

ドイツの生理学者。Mind 15巻に、Wundt が "H. Munk's doctrine of localised cerebral function" を批判した論文の紹介がある。W. Wundt "Zur Frage der Localisation der Grosshirnfunctionen" (Philosophische Studien Bd. vi., Heft 1.) また、James の The Principles of Psychology (1890) Vol.1 の p.30 にその名前が見える。

3. ベイン

Bain, Alexander (1818-1903)

スコットランドの心理学者。Mind誌(第1期)を創刊(1876)。

4. サー・チャールズ・ベル

Bell, Sir Charles (1774-1842)

スコットランドの解剖学者。運動神経と感覚神経の区別を発見。ダーウィンの「人及び動物の表情について」の緒論で表情研究に関して数ページに渡って言及されている。

5. ダーウィン

Darwin, C. (1809-1882)

イングランドの生物学者。進化論の創始者。Mind 誌の第1巻2号に Biographical Sketch of an Infant という論文を書いている。(Mind 誌にある彼の著作はこれのみ)

6. モッソ

Mosso, Angelo (1846-1910)

イタリアの生理学者 高所医学、筋肉疲労のメカニズムの研究に従事。Mind誌11巻に彼の「La peur (不安について), 1886」という著書(イタリア語原書のフランス語訳)の紹介がある。当時、Turin大学の教授。

7. シュナイダー

Schneider, Georg H. (生年・没年不明)

Ernst Haeckel の弟子。ダーウィンと文通があった (<http://darwin.lib.cam.ac.uk/>)。動物の欲求 (Der thierische Wille, 1880) を含む3冊の著書がMind誌で紹介されている。

8. ダンテ

Dante, Alighieri (1265-1321)

「ダンテが言うように心を石に変えてしまえば」の出典はおそらく、ダンテの「神曲：地獄編」第33歌(寿岳文章(訳)集英社、昭和49年初版、昭和52年四版、pp.336-341)であろう。中心的な部分を引用する。「あけがた眼がさめたとき、わしと一緒にゐた子供たちが、眠りながらもパンほしがって泣き叫ぶのを、わしは聞いた。そのときのわしの胸騒ぎ思ひやり、はやもう身も世もあらぬ嘆きにかきくれぬとすれば、おぬしはげに情が強い木石よ。今にして泣かずは、一体何を悲しんでおぬしは泣く？子供らはもう眼をさまし、ふだんならわしらの食物の運ばれる時刻となつたが、夢見を思ひかえし、親も子もみな不安に怯えてゐた。耳澄ますと下の方で、恐ろしい塔の扉を釘づけする音が聞こえる。さてはと、わしは子供らの顔をじつと見た、一言もなく。わしは泣かなんだ、わしの中身はもう石に化つてゐたので。」(ウゴリーノ伯、1288年7月末に子供たちとともに投獄され、翌1289年2月に餓死：同書の脚注から)

9. ヘルバルト

Herbart, Johann Friedrich (1776-1841)

ドイツの心理学者、教育学者

10. ティティアン（あるいはティツィアーノ）

Tiziano, Vecelli (1488?-1576)

ティティアンの「聖母被昇天」は、「Santa Maria Gloriosa Frari」（聖母マリア栄光教会）の祭壇後ろにあると多くの美術案内にある。本文中にある「the Academy at Venice」が「Accademia di Belle Arti」のことだとすれば、これはジェームズの記憶違いかもしれない。

今田恵「ウィリアム・ジェームズ」の記述に基づいて彼のヨーロッパ滞在体験を見ると、第1回目のヨーロッパ旅行は2歳から3歳のとき（1844-1845）、第2回目は13歳～16歳（1855-1858）でイギリスとフランスに、第3回目は17歳～18歳（1859-1860）でスイスとドイツに旅行している。成人後は、1867年4月から1868年までドイツ留学し、1873-1874にイタリア滞在、また1882-1883にベニスを含むヨーロッパ各国に滞在している。

これらを勘案すると、彼が2月にイタリアにいたのは1874年のことかと思われる。しかし、少年期の失神の詳細な記憶を考えると、1884年の論文に、その10年前の記憶をわざわざ「覚えている」と書くだろうかという疑問がある。またこの論文出版の2年前（1882）にジェームズは再度ベニスを訪れている。彼の場所の記憶が正しいとすれば絵の記憶が間違っているのであり、絵の記憶が正しいとすれば場所の記憶が間違っている。

11. ラスキン氏

John Raskin (1819-1900) イギリスの美術評論家

付録

シュートリンベル博士による論文の抄録の訳

A Contribution to the Theory of Sleep (Mind Vol.3, No.10, pp.263-264.)

1876年の秋に16才の少年がライプチヒの病院に運ばれてきた。彼には様々な感覚機能障害があって、それがごく稀な水準まで進行していたのである。皮膚感覚は全身で欠如。強い電気ショックや熱刺激を加えても何の感覚も生ぜず、接触感も見られなかった。同様の無感覚は全身の粘膜においても見られた。いわゆる「筋肉感覚」も見られなかった。この患者は閉眼時には、室内を移動しても、四肢を無理な姿勢にしても、全く気づかなかった。筋肉疲労の感覚さえもなかった。味覚も嗅覚もなく、左目は黒内障（amaurosis：眼球そのものには異常のない、神経性の盲：訳者）、右耳は聾であった。

つまり、彼が外界とコミュニケーションをとる手段は、右眼と左耳だけであった。こ

の二つのチャンネルを閉じてしまうと、脳は完全に外界から遮断されてしまうことになる。

何度か実験した結果は常に同じで、患者の健側の眼と耳をふさぐと、数分後に驚愕の表情とおちつかない様子が現れるがすぐに消失し、呼吸が緩徐かつ規則的になって入眠する。このことは、脳への刺激をすべてなくせば、睡眠を人工的に起こさせることができるという可能性を示している。

覚醒も興味深い。この患者は健側の耳に非常に大きな音刺激を与えるか、健側の眼に光を当てることによって覚醒するが、体をゆすったりしても覚醒しない。入眠後放置しておくとい時間でも眠ったあと、「自然に」覚醒する。これは何らかの「内的刺激」によるか、あるいは（脳の活動が徐々に活発になるために）わずかな外的刺激が残余の感覚に作用するかのどちらかであろう。

参考・引用文献

寿岳文章（訳）1977「神曲：地獄編」第33歌 集英社（昭和49年初版。ここでは昭和52年四版に基づく pp.336-341）

今田恵 1949 「ウィリアム・ジェームズ」養徳社

今田恵 1956「ウィリアム・ジェームズの心理思想と哲学」（世界大思想全集/哲学・文芸15） 河出書房

James, W. 1890 The Principles of Psychology, Vol.1&2. Dover publishing Inc., Mineola, NY.

James, W. 1892 Psychology, the briefer course. Dover publishing Inc., Mineola, NY.

Strümpell, A. 1878 A Contribution to the Theory of Sleep, Mind Vol.3, No.10, pp.263-264.